

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520244

研究課題名（和文） ヴァージニア植民とニューイングランド植民の比較研究

研究課題名（英文） A comparative study of the English colonies between Virginia and New England

研究代表者

高橋 康浩（TAKAHASHI YASUHIRO）

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：80303098

研究成果の概要（和文）：ヴァージニア植民地とニューイングランド植民地の比較研究を行うに際して、先ず第一に、ニューイングランド植民統治に関する一次資料を検証し、当該植民地建設の目的、ヴィジョンを再確認した。その結果、激しい宗教的情熱による理想の「神の国」の実現を目的とするピューリタニズムの姿が改めて浮かび上がることになった。これとは対照的とされる南部のヴァージニアに北部の Puritanism が影響を与えていくのは 18 世紀以降、次第に広まっていったことが米国における資料収集によって示唆された。信教の自由を基盤にした民主的な自由の精神が Puritanism を媒介にしながら、時間をかけて南部ヴァージニアの Episcopatism にも影響を与えていったことが垣間見られた。したがって研究の成果としては、18 世紀以降のすでに発展段階にある両植民地の比較研究をおこないアメリカ独立戦争にいたる双方向の影響を考察することで、この研究のテーマは完遂されるとの認識をえることができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of our research is to figure out the differences and similarities in two British Colonies, Virginia and New England, in North America. This research project has provided us a new perspective on the historical developments in two British Colonies in America. Although the former research tend to emphasize on the different characters of them, such as a commercially-oriented Virginia and a religiously-motivated New England, our attention has been paid to a possible similarities and/or corporations between them. Owing to the research trip to Yale University and the University of Virginia, we found some indications to back up our hypothesis. A possible hypothesis of the interactions between the two colonies could be found after 18th centuries. In other words, the puritanical sense of liberal democratic ethos might have spread over the Southern colonies as Virginia in slow but stead pace. To continue the research we need to focus on the 18th colonial history in America.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：英米・英語圏文学

キーワード：米文学

1. 研究開始当初の背景

本研究は、アメリカ創生期におけるヴァージニア植民とニューイングランド植民の実体から始め、その二つの植民が 17 世紀からどのような関係があったのか、現代アメリカにどのような影響を及ぼしているかに関わる研究である。これまでの研究動向を見てみると、ニューイングランド植民を重視する研究が多く、どちらかと言えばヴァージニア植民に関しては現代との関係の視点からそれほど重点的に研究されてこなかった感が強い。年代的には 1606 年のヴァージニア植民が 1620 年のニューイングランド植民よりも早いにもかかわらず、ヴァージニア植民へのスポットライトは弱かった。国内におけるヴァージニア植民に関しては断片的に歴史書に言及されているが、ヴァージニア植民自体を論じたものはなく、またニューイングランド植民との関連からの研究は皆無であった。そこで、ニューイングランドで展開された小規模な近代民主主義の思想と実践は、ヴァージニア植民地にも影響を与えたはずであるとの仮説に立脚して、植民当初の 17 世紀、18 世紀を中心に両植民地間の関係を探ろうとした。具体的には、人的交流による相互浸透の度合い、代議政体の様態とその変容、対インディアン政策の基本方針とその効果について、比較検討を考えた。

2. 研究の目的

(1) 代表者は、①17 世紀ピューリタンとアングリカンの教理的相違 ② ヴァージニアにおけるピューリタン説教者とニューイングランド人脈との接点 ③ 大覚醒運動の両植民地にもたらした政治神学思想的意義 ④ インディアン宣教の成果を主として探る。

(2) 分担者は期間内に以下の点を明らかにしたい。 ヴァージニアの貴族階級と植民統治の変遷 植民の経済は農園を主として

いかなる変遷をとげたか 植民にはアングリカンのみならずカトリック教徒もピューリタンもいたが、アングリカンはいかにして宗教的主導権を獲得したか インディアンへのキリスト教布教はいかに行われたか。これら 4 点を主として解明する。

3. 研究の方法

代表者は、

(1)ニューイングランドにおける植民統治に関する一次資料を検証し、従来の研究による歴史の定説であるニューイングランドの植民目的、そのヴィジョンを再確認する。ヴァージニア植民地よりもさらに先鋭であり、徹底したキリスト教宣教の情熱と地上における「神の国」の実現を目指したその根本理念と、その実現の度合い、実態についてプリマス植民地とマサチューセッツ湾植民地に関して一次資料によって明らかにする。

(2)原始キリスト教団の理想の信仰共同体を目指したはずのニューイングランド植民地の現実の姿、すなわち、移民第一世代が退いて第二世代となったときの推移を、高名な精神的指導者、ジョン・コットン、インクリース・マザーの残した文献を手がかりに解き明かす。さらに熱心なインディアン宣教の先駆者ジョン・エリオットの文献によりこの宣教の意義を考察する。

分担者は

(3) ヴァージニアにおける植民統治に関する一次資料を検証し、イギリス政府からの支配を脱した後の植民統治を解明する。ヴァージニア植民は植民者の自らの手に統治が行ったとき、その主導権を握ったのは裕福な貴族階級であった。貧しい年季奉公者や年季奉公開けの自由民、無学な植民者は貴族階級の恣意的な統治に甘んじていたが、彼らは代議委員制の樹立に成功し、以後議会を通して植民が運営・統治されていく。それがどのよ

うな形でなされていったかを一次資料によって明らかにする。

(4)ヴァージニア植民の経済と宗教に焦点を当てる。ヴァージニア植民の経済状況はもっぱらたばこに依存した経済であったが、植民が王の支配から離れると多角的に経済が発展していく。17世紀中期以降、イギリスからヴァージニアへ来た貴族階級がヴァージニアの政治、経済の中心的人物として君臨するが、彼らは高大な農園経営者であった。その農園での作物栽培を通して彼らは莫大な利益をあげ、ますます権力を増強していった。また、宗教的には、ヴァージニア植民にはアングリカン以外にもカトリック教徒やピューリタンがいたが、アングリカンが宗教上の支配権を獲得していった。その対立、反目、を通していかにアングリカンが実権を握ったかを資料を使って、明らかにする。

4. 研究成果

(1)平成21、22年両年度においては、引き続きニューイングランド植民統治に関する一次資料を検証し、当該植民地建設の目的、ヴィジョンを再確認した。その結果、通説のようにヴァージニア植民地と比較して、激しい宗教的情熱による理想の「神の国」の実現を目的とするピューリタニズムの姿が改めて浮かび上がるようになった。

21年度の夏季休暇にコネチカット州のイエール大学神学部における資料収集にて、インディアン宣教についての資料が両植民地の関係性を示唆していることにヒントを得た。北アメリカに植民したイギリス人にとって、先住民の存在はいかなるものであったのか、その関係の歴史を詳細にたどることは、ヴァージニア、ニューイングランドの植民地の性格を特定することに大いに寄与するのではないかという感触を得た。両植民地の交流に関する具体的な研究がほとんどないなかで、イギリス人の対インディアン政策をめぐる両植民地間の差異、及び共通項を収集した資料を手がかりに読み取っていきたい。またメリーランド州におけるピューリタンの活動が多文化的な視点から再解釈されそうであるとの資料にも接した。

(2)23年度は最終年度であるので、アメリカのヴァージニア州にあるジェームズタウンのメモリアル施設とヴァージニア大学の図書館を訪れる機会に恵まれた。「百聞は一見にしかず」であり、研究に関してかなりのインスピレーションを得ることができた。また図書館において、Kirbye J. Edwardによる*Puritan in the South*という20世紀はじめに著された歴史書も発見し、この本のテーマが我々のテーゼを支えるものであることが確認された。その他にも南部におけるPuritanismの影響について論じている歴史書、文学研究書も数冊発見し、研究の方向性は間違っていないことが確認され勇気付けられた。これらの研究文献の示唆するところは、北部のPuritanismが南部のヴァージニアに影響を与えていくのは18世紀以降、次第に広まっていったことである。信教の自由を基盤にした民主的な自由の精神がPuritanismを媒介にしながら、南部ヴァージニアのEpiscopatismにも影響を与えていったことが見て取れる。したがって研究の成果としては、18世紀以降のすでに発展段階にある両植民地の比較研究をおこないアメリカ独立戦争にいたる双方向の影響を考察することで、この研究のテーマは完遂されたとの認識をえることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

TAKAHASHI Yasuhiro, Contemporary Christian Pacifism in the United States Political activism of Jim Wallis、Glauben und Wissen in der Geistesgeschichte, Niigata University Scholars Series12, 2011, 査読有、pp.156-171,

高橋正平、スパーストウの火薬陰謀事件 説教とピューリタン革命、人文科学研究第128号、2011、査読無、pp.5-25
高橋正平、イギリス国教会派の説教 ウィリアム・ロードと詩篇、人文科学研究第126号、2010、査読無、pp.57-84、

高橋正平、'this was Gods doing' Cornelius Burgesの断食説教と火薬陰謀事件記念説教、人文科学研究第125号、2009、査読無、pp.15-50、

〔図書〕(計3件)

高橋正平、火薬陰謀事件と説教、三恵社、

2011、180、232、
高橋正平、ヴァージニア植民研究序史、
三恵社、2011、180、
高橋正平、ジェズイットとマキアヴェッ
リ三恵社、2010、183、

6 . 研究組織

(1)研究代表者

高橋 康浩 (TAKAHASHI YASUHIRO)
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：80303098

(2)研究分担者

高橋 正平 (TAKAHASHI SHOHEI)
新潟大学・人文社会・教育科学系・フェロー
研究者番号：70075810